

氏名	山田 美季
ヨミガナ	ヤマダ ミキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第616号 令
学位授与年月日	和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 日本彫刻史における邪鬼の造形変遷と思想背景－中国・朝鮮半島の造形の選択的受容と四天王護国思想との関係から－ 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	松田 誠一郎
(論文第1副査)			()	
(作品第1副査)			()	
(副査)	成城大学	教授	(文芸学部)	岩佐 光晴
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	佐藤 道信
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	須賀 みほ
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	片山 まび
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

本研究は仏教美術の鬼神のうち、わが国の神将像のなかでも、とくに四天王像の足元の「邪鬼」を中心にとりあげるものである。わが国の仏教美術の展開において濃密な繋がりをもつ中国・朝鮮半島との比較を通して、日本の邪鬼とりわけ彫刻作例を中心に、通史的な観点から造形変遷と思想背景について検討する。

その目的は四天王護国思想との関わりにみられる造形の展開に注目しながら、日本の彫刻作例を中心に7世紀から14世紀の邪鬼を明らかにすることである。本研究の特徴は四天王像の足元に造形される邪鬼に問題を特化する点、それによって四天王研究の蓄積を邪鬼研究の指標としながら、邪鬼を日本彫刻史の展開の中で捉えるところにある。また中国・朝鮮半島との作例比較から日本の邪鬼の造形変遷と特徴を明らかにし、その編年研究で得た知見をもとに思想背景を論じるという方法も本研究の特徴である。

先行研究では猪川和子氏、水尾比呂志氏によって造形変遷の先鞭がつけられた。思想背景ではとくに邪鬼の造形を支える体勢と調伏される体勢の二つに大きく分け、前者に善鬼、後者に悪鬼の性格を提言された長岡龍作氏、イム・ヨンエ氏の指摘が邪鬼の本質を捉えていると考える。本研究ではこれら先行研究の成果を踏まえつつ、造形変遷については主要作例・重要作例の集成と中国および朝鮮半島との比較を通じた相対的な特徴の提示、思想背景については造形に通底する観念とその背景や目的に関する考察を主な課題とした。

本研究は全3部、9章から成る。まず第1部、造形の受容と展開では、中国・朝鮮半島の展開を視野に日本の邪鬼造形史を捉えることで、わが国の特徴を提示した。つまり支える体勢と踏まれる体勢が7世紀には両方あらわれるものの、8世紀を境に調伏される体勢が典型となること、一方で12世紀後半以降になると、古代において一度淘汰されたはずの支える造形や武器を握る造形、中国・朝鮮半島では間々みられた蛇を握る造形が部分的に再出現することを明らかにした。

第2部、四天王護国思想と造形の選択-古代-では、第1部で得た知見をもとに7世紀から8世紀における調伏される体勢の選択に主体性を認め、中国や朝鮮半島の図像と折に触れて接しながらも、平安時代を通じて典型を大きく逸脱することなく展開することに注目した。そのうえで調伏される体勢か、調伏されない体勢か

ということに加え、武器を握るという造形に着眼点を得て、どのような背景、目的のもとで造形が選択されたのか、また選択された造形から、どのような性格が理解できるかに焦点を当てながら、古代、具体的には7世紀から10世紀頃までの展開を視野に入れ、奈良・西大寺四王堂四天王像邪鬼（8世紀後半）、京都・東寺講堂四天王像邪鬼（承和6年〔839〕または同11年〔844〕）、本体像を7世紀後半とする奈良・當麻寺金堂四天王像持国天、増長天、広目天の邪鬼（10～11世紀）をとりあげた。これら具体的な作品研究を通して、古代、日本の邪鬼が律令制を背景とした四天王護国思想に端を発するイメージを基調に展開すること、国の安寧を脅かす厄災の表象としての悪鬼、それに対照される護国の眷属としての善鬼という邪鬼観が通底することを論証した。

第3部、淘汰された造形の再出現、造像背景の多様化-中世-では、まず12世紀後半以降、調伏される体勢を基本としながら、支える造形や武器・蛇を握る造形が、部分的に再出現するという造形変遷の特徴に着眼した。そこで第2部と同様にこれら造形にまつわる背景、目的、性格に注目しつつ、本体像を7世紀後半とする奈良・當麻寺金堂四天王像多聞天の邪鬼（12～13世紀）、静岡・願成就院毘沙門天像邪鬼（文治2年〔1186〕、運慶作）、和歌山・慈尊院四天王像邪鬼（14世紀）をとりあげた。結果、古代に見られた造形の再出現は四天王護国思想とは切り離されること、一方で受動に服する従来の邪鬼の造形に対して、中世では武器・蛇を握る造形、支える造形を組み合わせることで、典型を基調としながらも主体性・能動性を内包する新たな邪鬼観が共有されることを論証した。とりわけ武器・蛇を握る邪鬼の造形には、武家政権下において闘争の正当化を担う像との関わりが認められた。

本研究の主題は造形変遷と思想背景に集約される。前者については邪鬼が中国・朝鮮半島の影響を受けながらも、日本彫刻史のなかで自律的に展開することを明らかにした。また後者については邪鬼が上に立つ本体像と相関性を保ち、本体像の果たす意味を担う存在であることを明らかにした。そして以上の検討を通して、四天王像あるいは神将像とは異なるアプローチとして邪鬼を研究することの価値を捉え、邪鬼を通して日本彫刻史を展望することで、これまで見落とされてきた問題が新たに浮き彫りになる結果となった。このことから日本彫刻史における新たな視座の提示を、邪鬼研究の意義として提示した。

（総合審査結果の要旨）

申請者・山田美季氏の論文は、四天王像の足下にあらわされた邪鬼に焦点をあて、7世紀から14世紀にわたる時期の造形変遷を跡づけるとともに、その造形の思想的背景を古代と中世に区分して論じたものである。

第1部における造形変遷の論述は、銘記・記録等により製作年代の判明する基準作例を網羅的に集成して、実証的で信頼性の高い編年史を組み立てている。また、わが国の邪鬼の祖型となった中国・朝鮮半島の鬼神との比較を通して、東アジア的な視野から日本の邪鬼のもつ地域的な特性を明らかにする。ことに、中国・朝鮮半島の作例では「支える体勢」と「調伏される体勢」のふたつの体勢が長期間みられるのに対し、わが国の8世紀以後の作例では後者のみが選択的に受容されること、また12世紀後半以後、支える体勢が部分的に再びあらわれるとともに、日本において7世紀にあらわれ8世紀にみられなくなった武器を握るかたちや、中国・朝鮮半島の作例に広くみられる蛇を握るかたちがあらわれることを指摘した点は、新発見として注目される。

第2部における日本古代の邪鬼の思想的背景に関する論述は、奈良・西大寺四王堂四天王像（第4章）、京都・東寺講堂四天王像（第5章）、奈良・當麻寺金堂持国天・増長天・広目天像（第6章）の邪鬼を取り上げ、律令国家体制のもとに展開した鎮護国家仏教のなかで、四天王像足下の邪鬼の造形が『金光明経』にもとづく四天王護国思想と密接な関係にあることを明快に説く。特に第4章において、西大寺像邪鬼にみられる「調伏される姿勢」の選択を四天王護国思想と結びつけ、これを「悪鬼」の造形と定義づけるとともに、武器を握るかたちを四天王を補助する「善鬼」の造形と理解し、善鬼・悪鬼の両者が併存する中国・朝鮮半島の鬼神から、「悪鬼」としての性格を強めてゆく日本古代の邪鬼への変貌過程をそこに読み取ろうと

する論旨は、わが国古代における邪鬼観の形成の問題を考える上でまことに興味深い。

第3部における日本中世の邪鬼の思想的背景に関する論述は、當麻寺金堂多聞天像（第7章）、静岡・願成就院毘沙門天像（第8章）、和歌山・慈尊院四天王像（第9章）の邪鬼を取り上げ、武家政権下における個別的な事例研究を通して、それぞれの造像背景について検討する。第1部において指摘された12世紀後半以後の造形面での変化を、主体性・能動性を強調する中世の邪鬼観のあらわれと捉え、そこに四天王護国思想に立脚した古代の邪鬼観からの乖離を認める論旨には説得力がある。特に武器や蛇を握る邪鬼の造形を武家政権下における権力の正当化の問題と結びつけて論じた点は、北条時政発願の願成就院毘沙門天像の制作背景に新たな視点を提供しており、あらためて注目する必要がある。

本論文は、美術史学の立場からの日本の邪鬼に関するはじめての体系的な研究成果である。その造形史や思想背景に関する通史的な解釈は、今後の邪鬼の研究において指針となるものといえ、高く評価することができる。